



笠井潔

戦争 ウォーズ ヴァンパイヤー
1 吸血神ヴァーオウの復活

KADOKAWA NOVELS

上巻の蘇る吸血神。ヒーロー九鬼と美少女キキを巻き込む死闘。SF伝奇アクション第1弾。書下し・大河SFアクション



ガクカフパルズ

昭和五十七年一月二十五日初版発行
昭和六十年十月三十日七版発行

著者 かさいきよし
笠井潔

発行者 角川春樹

ヴァンパイヤー戦争^{クォーリス}1

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三十三 振替東京三一九五〇八
〒一〇二 電話 営業〇三三六八五三 編集〇三三六八四二

笠井 潔

ヴァンパイア戦争 1
吸血神ヴァーオウの復活

KADOKAWA NOVELS

蘇る吸血神。ヒーロー九鬼と美少女キキを
巻き込む死闘。SF伝奇アクション第1弾。

書下し・大河SFアクション

角川

KADOKAWA NOVELS

●作者のことは

エンターテインメントに徹した小説を書いてみた。

善神と悪神の宇宙戦争、ムー伝説、CIAとKGBの暗闘、そして吸血鬼。

子供の時から面白くて仕方なかったお話の数々を、

SF、伝奇、スパイ小説などの枠を取り払って

全部一作にぶち込んでみたかどうか。

こんな夢を実現するつもりで書いてみたのが、この作品です。

略歴 一九四八年東京生。処女作「バイバイ・エンジェル」で角川小説賞受賞。ミステリー、SFの分野で活躍。

771601-4 C0293 ¥680E

面680円



ガクカパブリズ

昭和五十七年一月二十五日初版発行
昭和六十年十月三十日七版発行

著者 笠井潔 かさいきよし

発行者 角川春樹

ヴァンパイヤー戦争^{クワイヤーズ}1

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九五〇八
〒〇二電話 営業〇三三六八八二 編集〇三三六八八三

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-771601-4 C0293

KADOKAWA NOVELS

ヴァンパイヤー戦争^{ウオーズ}Ⅰ

吸血神ヴァーオウの復活

笠井 潔

1 絵・本文イラスト／生頼範義

目次

序章 アリゾナ砂漠から

9

第一章 地^{アンダーグラウンド・ウォー}下戦争の招待

16

第二章 吸血鬼^{ヴァンパイヤー}の跳梁^{ちやうりやう}

56

第三章 単^{ワン・マン・アーミー}独軍隊の出撃

100

第四章 非^{イリーガル}合法員の帰郷

145

第五章 矮^{リリパット}人部隊の死闘

188

終章 トランシルヴァニア山地へ

243

序章 アリゾナ砂漠から

アリゾナの砂漠に蒼い闇が落ちた。悲しげなコロコロの吠き声^なが長く尾を引いて響いた。

「いよいよ、あと三日ですね」

プロミーンシュース・セクター中央管理ビル最上階の、磨き上げられた新品の一枚ガラスの天井から、たちまち瞬き始めた空一面の星屑を見上げている老タイタンに、トマス・ハーバー博士が声をかけた。年少の同僚や部下たちから「巨人^{グイジン}」と呼ばれている大柄な老宇宙科学者は、息子よりも若い後輩研究者の無駄口を黙殺した。

老人のいかつい肩を眺めながら、トム・ハーバーは考える。

……なにしろ、たいへんな爺さんだ。あの、エドウィン・ハッブルと直接の交友があったというのだから。

NASAの航空宇宙局関係の予算が年々削られるなかで、たった五年で、砂漠のどまんなかにも、この世界最大の宇宙通信基地をこしらえてしまったのだから……。

青年は老タイタンの視線を追った。もちろん、老人が凝視していたのは、白鳥座X-1の方向だった。

老人が「ヘメッセージ」の存在を知ったのは、十年前のことだ。NASAの天体観測衛星ウルフが発見した宇宙空間のX線源のひとつ白鳥座X-1から、点と線からなる意味不明のモールス信号が地球に向けて発信されていたのだ。

信号は、約十三分二十五秒の周期でくり返され、三日間続いて途絶えた。パルスとパルスの間隔は、一・三五六一九〇二七秒だった。パルスの精度はこれ以上だったかもしれないが、人類はそれを測定するだけの正確な時計を持っていなかったのだ。

「ヘメッセージ」をめぐるって、NASAの科学者たちのあいだには大混乱が惹きおこされた。従来から有力なブラック・ホール候補とされていた白鳥座X-1である。そこから、今度は、複雑きわまりないパターンの

パルスが送られてきたのだ。

新型のパルサー（電波星）だ、という見解が多数を占めたけれども、どんな中性子星の運動がこのようにも複雑なパターンのパルス発信を可能にさせるのかについては、誰ひとり充分に説明することはできなかった。

パルサーとブラック・ホールの、未だ解明されていない微妙な相互作用の結果——、ということまで葬り去られるはずの発見だった。もし、老タイタンが、確信を持って、ヘメッセージを解読に全力をあげなかったとしたら。

そこに意味が隠されているならば、どんな暗号でも解読できないということはない。老タイタンの指令のもとに、NASA内外から集められた有数の数学者、記号学者、言語学者、暗号学者による特別チームが編成された。部分的な成果は意図的に秘匿された。約一年の歳月と膨大なコンピュータ・システムを投入しての作業が完成した直後、老タイタンはワシントンに親友の上院議員を訪問した。大統領が、全世界に向けて

の特別記者会見で、宇宙からのヘメッセージを読みあげたのは、それからほぼ半年後のことだった。

その時、すでに七十歳を越えていた老タイタンの、宇宙科学者としての最後の仕事は、ヘメッセージへの返信を送ることのできる、巨大宇宙通信基地を建設することになった。白鳥座X-1は地球から八千光年の位置にある、太陽の約二十倍の質量を持った超巨星であり、太陽の約三倍という質量のブラック・ホール化した伴星を伴っていると考えられていた。

ヘメッセージによれば、どのように非常識であろうとも、この奇怪な連星に属する惑星が、友好的な知的生命体の文明の故郷であるに相違なかったのだ。アリゾナの人跡稀な砂漠地帯に、五年の歳月をかけて、巨大な電波送信設備が建造された。直径百メートルの巨大な送信用おわん型アンテナ、その横にある微妙な制御システムを収めた中央管理ビル、アンテナの周辺に四基配置された合計五百万キロワットの発電力を持つ専用の原子力発電装置……。

三日後には、これらの膨大で複雑な構造物が一体と

なって、八千光年の彼方に人類のメッセージを発信しはじめる予定だった。この、人類史を画する輝かしい一日のはじまりには、大統領その人が立ち合うことになっている。たとえ、未知の異星人からの返信が一万六千年後という遙かな未来のことであろうとも、人類はすでに孤独ではないのだ。

「しかし、博士」トム・ハーパーがまた口を開いた。

「HDE 226868 という超巨星と、ブラック・ホール化した伴星との連星に、はたして生命の居住可能な惑星が本当にあるのでしょうか。そんな恒星系は、私にはまるで宇宙の地獄みたいに思われますが……」

「トム、それは違うな。白鳥座X-1にあるのは、おそらく、巨大な人工惑星だけだろう。全体がエネルギー変換装置と電波発信装置だけで出来あがった人工惑星だ。あれだけの強力なパルスを出すには、いったいどれほどの莫大なエネルギーが必要だったか考えてみるがいい。NASAでは、ヘメッセージがパルサーに由来するものだと考える研究者が多数派だった。彼らの意識を支配していたのは、ただの通信に私たち

の太陽が出すのと同じくらいという膨大なエネルギーを浪費するような種族など、どこにもいるわけがないという思いこみだった。

……しかし、それを可能にするエネルギーが、白鳥座X-1には存在しているのだ」

「いったい、何でしょう」

「超巨星の構成物質は、絶えまなくブラック・ホールに吸いこまれている。トム、これは河だよ、私たちが想像することもできないほどのエネルギーの大河だ。この河の一部でもせき止めることができれば、そこから得られる利用可能なエネルギーは……」

「宇宙の水力発電所、……ですか」

トム・ハーパーは呆然としていた。

「比喩としてなら、そういつてもいい。連中は、偉大な種族だよ、トム。私は畏れさえ感じるほどだ。ブラック・ホール化した伴星を持つ超巨星は、連中のテレビ塔の専属発電機にすぎない。白鳥座X-1は連中の野外送信所さ。故郷はまた別の場所にある……」

「たとえ八千年後だとしても、そんな怖いほどに高

い科学文明を持つ種族に、私たちの、人類の存在を知らせてしまってもいいのでしょいか」

トム・ハーバーはふとこう呟いた。なぜか、冷たいものが背筋を駆けぬける気分だった。

「トム。判断の余地はなかったんだ。私はそう考えるね。たとえ悪魔を呼びこむことになるうとも、人類は〈他者〉の存在を自覚しなければならぬ時期だった。人類は大人にならなければいけないんだ。このままでは、人類は子供のまま自滅してしまふよ。それに、目標さえ自覚すれば、まだ最低一万六千年という長い長い時間が残されている。優れた異種族と出遇うための自己訓練期間として、私たちにはほどよい長さだと思わないかね……」

ガラスの円天井の彼方は、もう完全な夜空だった。星々のきらめきを遠く見上げながら、老人は自分に語りかけるように低い声でいった。

「……私も、老いた。プロミューシユース計画が軌道に乗ったところで、公職からは退くことになるだろうな。なに、余生は、カナディアン・ロッキーの山荘で、子

供の時に初めて買ってもらった天体望遠鏡を覗いて、そう、新しい彗星でも探して暮らすさ……」

しかし、トム・ハーバーは、老人の呟きをもう聞いてはいなかった。砂漠の果てから、闇のなかをプロミューシユース・センターの正門に向けて疾走してくる、ギラギラと不吉に輝くふたつの大眼玉に注意を奪われていたのだ。

大型トラックだ、とトムは思った。

こんな時刻にセンターに着く予定のトラック便などありえないはずだった。民間の車だということは考えられなかった。エコロジストの反対が激しかった新型原子力発電機の警備もふくめて、特に三日後の完成式に備え、アリゾナ砂漠のこの一帯は数千名の州兵の手で厳重に封鎖されているのだ。さらに、NASAの新プロジェクトに対してはいつもそうであるように、CIAやFBIの防諜組織も、いたるところに見えない監視網を張りめぐらせているはずだった。

トムは不審そうに軽く首を振った。

戦闘は、次の瞬間に突然始まった。管理ビルの最上

階にいるトムの眼に、左右二か所は同時に起こったオレンジ色の炎の爆発が映しだされた。

「博士、たいへんです。今、基地のコンクリート壁が爆破されました」

思わず、トムは叫んでいた。何者の仕業なのか、まるで理解できなかった。探照灯の光が、狂ったようにセンター前庭の広大な芝生を、侵入者の影を求めて跳ね回りはじめていた。怪鳥の啼き声に似たサイレン音が不吉な音色で轟きはじめたようだった。

「おお……」

立ち竦んだ老タイタンは悲痛な呻きを発した。センターの前庭では、たちまち侵入者と警備兵とのあいだで激しい銃火が交されはじめた。床を揺るがす大爆発は、その時起こった。

不審な大型トラックは、全速力でセンター正門の金属網のゲートを突き破って、前庭に乗り入れ急停車した。ばらばらと駆けよろうとする警備兵は、荷台に据えつけられた二機の機関銃で、端から吹きとばされるように撃ち倒されていく。激しい銃火に後退して伏せた者

たちには、容赦なく手榴弾が荷台から投げられる。警備兵のM16突撃銃では、まるで相手にならない。トラックの男たちが投げける、間断ない手榴弾の炸裂で、前庭の芝生はあちこち穴だらけになっていく。

「博士、あれを」

トム・ハーバーは恐怖の呻き声をあげて、侵入者のトラックを指さした。兇々しい短い砲身が、大蛇のようにゆっくりと首を回らせているところだった。ヴェトナムに行ったトムには馴染み深いM一〇一榴弾砲だった。怖しい数秒が流れた。狙いを定めた砲手は、そこで大蛇の首を固定した。今や、砲身は微動もしない。

「ああ……」

老タイタンのおし殺した悲鳴は、窓の特殊強化ガラスを激しく震動させる爆発音でかき消された。榴弾砲弾を浴びて、巨大なおわんが爆発した。世界最大の送信用アンテナ装置は、一瞬のうちに捻じまげられた醜い鉄屑に変ってしまっていた。アンテナの残骸に向かって、榴弾砲はなおも執拗に二度、三度と火を吐き続けた。

その時だった。広い管理ビル最上階の広間の隅で、エレベーターの扉が開いた。そこから無言のままばらばらと走りこんで来たのは、短機関銃や突撃銃で武装した五、六人の侵入者だった。全員が、顔を黒く塗り、上から下まで黒づくめの戦闘服姿だった。

「そこだ」

蝙蝠を思わせる奇怪な黒マントを着け、黒い布で顔を隠した男が、鋭い口調で部下たちに指示を与える。

トムや老タイタンの存在には何の関心もないらしい。襲撃者たち三人が殺到したのは、センター中央管理ビルの心臓部ともいえるべき、鋼鉄の壁に囲まれた小空間——中央調整室の入口だった。襲撃に加わらず、リーダーの足元に一人だけ蹲っているのは負傷者かもしれない。

「やめてくれ、それだけは」

老タイタンの絶叫にはどんな効果もなかった。

三人の男たちが、複雑な電子器械で床から天井まで埋めつくされた中央制御室から出てきたのと入れかわりに、老人は、男たちを突きとばすようにして制御室

内に駆けこんだ。一瞬の動揺をリーダーの「伏せろ」という叫びが押さえこみ、全員が転がるように床に伏せた。強力な爆弾の爆発で、中央制御室が、その主人である老タイタンもろとも完全に破壊されたのは、次の瞬間のことだった。

床にくずおれて、信じられぬ不条理に押し潰されたトム・ハーバーは、ただすすり泣いていた。

もう、駄目だ。アンテナだけならばともかく、どんな宝石よりも貴重な電子制御機械までが完全に破壊されてしまつては……。再建には、また五年もの歳月がかかるだろう。そして、老タイタンがこんなふうに死んでしまった今、いったい誰がプロミュークス・センターを再建することができるというのだろう。もう、駄目だ……。

悲痛な女の声で、蹲っていたトムは涙で汚れた顔をあげた。若々しい、澄んだ声だった。

「みんな、退って。その馬鹿な科学者も退らせて。私は、もう動けない。盟約の通りにここで、……けりをつけるわ。さあ、早く」

男たちが駆けより、トムを肩を乱暴に搦つかんで床を引
きずった。走りながら、マントの男が、叫んだ。

「ヴァーオオ・サリッド」

床に伏せながら、男たちが応じた。

「ヴァーオオ・サリッド」

なにか不吉なものを腹の下に押しこむようにしながら、女も叫び返した。黒塗りだったが、トムにも細い
眼鼻立ちが緊張で美しい、その横顔だけは眺められた。
まだ二十歳を越えたばかりだろう。

「ヴァーオオ・サリッド」

女の叫び声とともに、怖しい光景がトムの視界に溢
れた。今度こそ、トムは声の限り悲鳴をあげた。若い
女が腹の下に押しこんだのは、高性能の小型ナバーム
弾だったに違いない。

眼底を灼きつくす白い炎の爆発だった。一瞬の後、
そこには、四肢を奇怪にひきつらせ、全身からオレン
ジ色の炎を噴き出して轟々ごうごうと燃えさかる、さながら松
明たいまつと化した娘の細い肉体だけが残されていた。

人肉の焦げる嫌な臭いが、トム・ハーバーの鼻腔びくちうを

満たした。男に肩を搦つかまれたまま、床に四つん這ばいに
なったトムは、そのまま苦しげに、胃のなかの夕食の
残骸を吐いていた。